内山愚童の「入獄記念　無政府共産」の現代文です。柏木隆法の 1976 年の「内山愚童　大逆事件のイデオローグ」からのです。

****

小作人はなぜ苦しいか

人間の一番大事な、なくてはならぬ食物を作る小作人諸君。諸君はマァー、親先祖の昔からこの人間の一番大事な食物を、作ることに一生懸命働いておりながら、くる年もくる年も足らぬ足らぬで終わるとは、何たる不幸の事なるか。それは仏者の言う前世からの悪報であろうか、しかし諸君、二十世記という世界的である今日では、そんな迷信にだまされておっては末には牛や馬のようにならぬばならぬ。諸君はそれをうれしいと思うか。来る年も、来る年も貧乏して、足らぬ足らぬと嘆くことが、もしも冬の寒い時に、老いたる親をつれて逗子や鎌倉、沼津や葉山と寒さを厭うて遊んで歩いた為だというならば、そこに勘忍のしようもある。もしも夏の暑い時に病める妻子を引き連れて箱根や日光に暑さを避けた、そのためにことしは足らぬとでもいうならば、そこに慰める事もできよう。ことしは、長男をドイツに遊学させ、弟を大学に娘を高等女学校へ入れたので、山林を一町売ったとか、田地を五反質入したとかいうならば、後の楽しみをあてにして、妻との寝物語も辛くはなかろう。ところが、諸君が年がら年中足らぬ足らぬというのは、決してそんなぜいたくな訳

ではない。正月がきても、盆がきても、新しい着物一校着るのではなく、世は二十世記の文明に建築技術は進んだといっても、諸君の家には音さたがない。諸君の家は五百年も千年も以前の物である。しかし、それは少しも無理ではない。着物は呉服屋に銭を出さぬはならぬ。いえは大工に手間賃を払はねばならぬ。しかも諸君は悲しいことに、その銭を持たない。そこで諸君の着物はいつもボロボロで、家は獣の巣のようである。しかしながら、食物は諸君が自分で作るのであるから、一番上等の物をたべているかというに決してそうではない。上等の米は地主にとられて、自分は粟飯や麦飯を食べて、そうして地主よりも商人よりも多く働いている。それですら、来る年も来る年も、足らぬ足らぬというのが小作人諸君、諸君が一生涯の運命である。

これは、マア、どうした訳であろうか。一口に歌ってみれば

なぜにおまいは貧乏する。訳を知らずばきかしょうか。天子、金持、大地主。人の血を吸うダニがいる。

諸君はよく考えて見たまえ。年がら年中汗水流して作った物を、半分は地主という泥坊にとられ、残る半分で酒や醤油や塩や肥料を買うのである。が、その酒にも、肥料にもすべての物に残らず政府という大泥坊のためにとられる税金がかかっている。その上に商人という泥坊がもうけやがる。そこで小作人諸君のように、自分の土地というものを持たずに、正

直に働いている者は一生涯貧乏と離れる事はできないのである。まだそればかりならよいが、男の子ができれば小さな間、貧乏のなかでそだてあげ、やれうれしや、これから田畑の一あぜも余分に作って、借金なしでもやってゆきたいと思うまもなく、二十一となればいやでも何でも兵士にとられる。そうして三年の間、小遣銭を送って、聞きたくもない人殺しのけいこをさせられる。それで戦争になれば、人を殺すか、自分が殺されるかという血なまぐさい所へ引っぱりだされる。せがれが兵士に三年とられているうちに家にいる親父は妻子を連れて乞食にでだしたという者もある。兵士にでたせがれは、うちが貧乏で金は送ってくれず、金がなければ古兵にいじめられるので、首を括って死んだり、川へ飛び込んで死んだり、又はは鉄道で死んだりした者がどれほどあるのかしれないのである。

こんな具合いに小作人諸君をいじめるのだもの、諸君が朝は一番鶏に起き夜は暗くなるまで働いたとしても、諸君と貧乏は離れることはできない。これは全体なぜであろうか。同じ人間に生まれておりながら、地主や金持ちの家に生まれるならば、二十四五までも三十までも学校や外国に遊んでいて、そうしてうちに帰れば、夏は涼しい所に暑さをしのざ、冬は暖かい海岸に家を建てて、遊び暮らしているではないか。自分は桑の葉一枚つみもせずに、絹の着物に包まって、酒池肉林とぜいたくをして何もせずに一生を遊び送るのである。諸君はしらにであろう。大地主や金持ちが夏の三十日を日光や

箱根で遊ぶのに、一人で二千や三千の金を使うというではないか。三千円ですぞ、諸君が二十歳の年令から五十歳まで、休まず食わずに働いても三千円という金はできないではないか。そうして、その人たちは兵士などにはでなくてもよいのである。小作人諸君。諸君もきっと今の金持ちや大地主のようにぜいたくをしたいであろう。たまには遊んでうまい物を食べたいであろう。けれどもそれが諸君にはできないというのは、諸君が一つの迷信を持っているからである。親先祖の昔からこの迷信を大事にしていたために、地主や金持ちのするようなぜいたくを夢にも見ることができないのである。諸君がわれわれのいう事を聞いて、今すぐにでもその迷信を棄ててさえすれば諸君は本当に安楽自由の人となるのです。しかし、天子や金持ちは、諸君にこの迷信を棄てられては自分たちが遊んでぜいたくをすることが、できなくなるから、昔より天子でも大名でもこの迷信をなくてはならない、ありがたきものにして諸君を欺いてきたのである。それだから諸君の為には、今の天子でも大臣でも昔の徳川も大名も、親先祖の昔から恨み重なる大敵であるということを忘れてはならぬ。明治の今日もそのとうり、政府は一生懸命で上は大学の博士より下は小学校の教師までを使って、諸君には迷信を棄てられないようにしている。そして諸君は、また、これをありがたく思っている。だから諸君は一生涯、いや孫子の代まで貧乏と離れる事はできない。しからば、小学校教師などが、諸君や諸君の子供に教えこむ迷信というのは何であるのか。迷信というのは、まちがった教えを大事本尊に守ってい

る事をいうのである。なぜに諸君が昔からこのまちがった教えをもっているのか、というｔことはあとにして、どういうまちがった教えが迷信であるかとうことを語ってみよう。

- 諸君は地主から田や畑を作らせてもらうから、そのお礼として小作米をやらねばならぬ。
- 諸君は政府があればこそわれわれ百姓は安心して仕事をしていることができる、そのお礼として税金をださねばならぬ。
- 諸君は国に軍備がなければ、われわれ百姓は外国人に殺されてしまう。それだから若い丈夫な者を兵士に出さねばならぬ。

という三つのまちがった教えが深くしみ込んでいるから、いくら貧乏しても小作米と税金と子供を兵士にだすことに反対することができなくなっている。もしも小作米をださなくてもよろしい、税金を納めなくてもよろしい、かわいい子供を兵士にださなうてもよろしいなどという者があれば、それは謀反人である、国賊であるなどといってその実、自分たちの安楽自由の為になることを聞く事も読む事もしないでしまう。ここは一番よく考えて読んでいただきたい。しからば、なぜ小作米を地主へださなくてもよろしいかというに、それは小作人諸君が耕す所の田や畑を、春から秋まで鍬もいれず種もまかず肥料もせずに、放っておいてごらんなさい。秋がぢたとて米一粒できません。夏になっても麦半粒とれるもの

ではない。ここをみればすぐに知れるではないか。秋になって米ができ、夏になって麦ができるのは、百姓諸君が一年中汗水流して、体まずに働いたためである。そうしてみれば、自分が働いてできた米や麦は残らず百姓諸君のものである。何をねばけて地主へ半分ださねばならぬという理屈があるか、土地は天然自然にあったものを、われらの先祖が開墾して食物のできるようにしたのである。その土地を耕してとった物を自分の物にするのが何で謀反人である。

小作人諸君、諸君は長い間地主に盗まれてきたのであったが、今という今、この迷いがさめてみれば、長い長い恨みの腹いせに年貢をださぬばかりでなく、地主の倉にある麦でも金でも取り返す権利がある。地主の倉にあるすべての物をとりだすことは、決して泥坊ではない。諸君とわれらが、久しく奪われた物を回復する名誉の事業である。次に、政府に税金を出さなくてもよろしいということはなぜであろうか。小作人諸君、難しい理屈はいらぬ。諸君は政府というもののある為にどれだけの安楽ができているか。少しでもこれが政府様のありがたい所だということがあったなら、言ってみたまえ。昔から泣く子と地頭には勝てぬといって、無理な圧制をするのがお上の仕事と決まっているではないか。こんな厄介ものを生かしておくために、正直に働いて税金を出す小作人諸君は貧乏している。なんて、バカの頂上である。諸君はこんなバカらしい政府に税金をだすことをやめて、一日も早く厄介ものを滅ぼしてしまおうではないか。そうして親先祖の

昔より、無理非道に盗まれた政府の財産を取り返して、みんなの共有にしようではないか。これは諸君が当然の権利で、正義を重んずる人々は進んで万民が自由安楽の為に政府に反抗すべきである。今の政府を滅ぼして、天子のなき自由国にするということが、なぜ謀反人のすることでなく、正義を重んずる勇士のすることであろうかというと、今の政府の親玉たる天子というのは、諸君が小学校の教師などよりだまされちるような神の子でも何でもないのである。今の天子の先祖は九州のすみから出て、人殺しや強盗をして同じ泥坊仲間のナガスネヒコなどを滅ぼした、いはば熊坂長範や大江山の酒呑童子の成功したのである。神様でもないことは少し考えてみればすぐ知れる。二千五百年続きました夷といえば、さも神様ででもあるかのように思われるが、代々外は蛮夷に苦しめられ、内は家来の者におもちゃにせられてきたのである。明治になってもそのとおりで、内政に外交に天子は苦しみ通しでありながら、天子の苦しむのは自業自得だから勝手であるが、それがために正直に働いている小作人諸君が、一日一日と食うことにすら苦しんでいるのだから、日本は神国だなどといっても諸君は少しもありがたくないであろう。こんなにわかりきったことを大学の博士だの学士だのという弱虫共は、言うことも書くこともできないので、嘘八百で人をだまし、自らを欺いている。また、小学校の教師なども、天子のありがたいことを説くには困っているが、段段うそが上手になって一年三度の大祝日には、そらとぼけた真似をして天子は神の子であるということを、諸君や諸君の子供に教え込ん

でいる。そうして一生涯、神の面をかぶった泥坊の子孫のために働くべく、使うべく、教えられるから、諸君はいつまでも貧乏と離れることはできないのである。ここまでとけばいかに勘忍強い諸君でも、諸君自身の奪われていたものを取り返すために命がけの運動をする気になるのであろう。小作人諸君。諸君は久しき迷信の為に、国に軍隊がなければ、民百姓は生きておられないものと信じていたであろう。なるほど昔も今もいさ戦争となれば、軍隊のない国はある国に滅ぼされてしまうに決まっている。けれどもこれは天子だの政府だのという大泥坊がいるからなのだ。

戦争は政府と政府とのけんかではないか。つまり泥坊と泥坊が仲間げんかするために民百姓が難儀をするのであるから、この政府という泥坊をなくしてしまえば戦争というものはなくなる。戦争がなくなればかわいい子供を兵士にださなくてもよろしいということは、すぐに知れるであろう。そこで小作米を地主にださないようにし、税金と子供を兵士にやらないようにするには、政府という大泥坊をなくしてしゃうのが一番早道であるということになる。

しからば、いかにして、この正義を実行するのか。方法はいろいろあるが、先ず小作人諸君としては、十人でも二十人でも連合して地主に小作米をださぬこと、政府に税金と兵士をださぬことを実行したまえ。諸君がこれを実行すれば、正義は友を増やすものであるから、一村より一郡に及ぼし、一郡

より一県にと遂に日本全国より全世界に及ばして、ここに安楽自由の無政府共産の理想国ができるのである。

何事も犠牲なくしてできるものではない。われと思うん者は、この正義の為に、いのちがけの運動をせよ。

（ヲワリ）

発行の趣旨

この小冊子は、明治四十一年六月二十二日、日本帝国の首政に於いて、わが同志の十余名が無政府共産の赤旗を掲げて、日本帝国の主権者に抗戦の宣告をなした為に同年八月二十九日、有罪の判決を与えられた。

大杉　栄	荒畑　勝三	佐藤　悟
百瀬　すすみ	宇都宮　卓爾	森岡　永治
堺　利彦	木村　源次郎	大須賀　さと
山川　均	小暮　れい	徳永　保之助

右諸氏が入獄記念の為に出発したのである。

この小冊子は、一年もしくは四年の後出獄する同志の不在中、在京僅少の同志が心ばかりの伝道であります。

この小冊子を読んで、きたるべき革命は無政府共産主義の実現にあることを意得せられし諸君は目下入獄中の同志に葉書にても送られたし、これは入獄諸氏に対する唯一の慰めで、かつ戦士の胆力を研究する福音であります。

入獄諸氏に送られる手紙は

東京市牛込市ヶ谷東京監獄在監人何々々君とかき、そうして差出人の住所性名を明らかにして出してください。

この諸冊子は、長き長き迷信の夢より諸君を呼びさまし、近き将来になさぬばならぬわれらの革命運動をあやまらない為に広くかつ深く伝導せねばならないから、無政府共産ということを意得され、ダイナマイトを投ずることも辞せぬという人は一人も多くに伝導してもらいたい。しかしまた、これを読んでも意得のできない人は果して現在の社会は正義の社会であるか、又われらの理想は今の社会に満足するものかどうかを深く取調べてもらいたい。